compass
vol.7 No.9
大原生のための 公認会計士情報誌
C.P.A. O-hara Method to Pass A State-exam Successfully
2023年12月25日発行

巻頭言 『言葉の力を信じて』 P.1

特集1 令和6年公認会計士第Ⅰ回短答式試験 短答式試験の全貌解明!

短答式試験の出題傾向と難度

企業法 P.4~5
管理会計論 P.6~11
監査論 P.11~13
財務会計論（計算） P.13~15
財務会計論（理論） P.16~17

過去問分析の価値と短答対策について

企業法 P.18
管理会計論 P.18~20
監査論 P.20~21
財務会計論（計算） P.21~22
財務会計論（理論） P.22

特集2 演習期の過ごし方

就職・転職のことなら、多くの法人との信頼関係を築いてきた
『大原キャリアスタッフ』へ

『言葉の力を信じて』

言葉には霊妙な力が宿っている。自らが口にする言葉一つで気持ちが前向きにも後ろ向きにもなる。だからこそ、いつも前向きな言葉を発して合格へ突き進んで行こう。

今年の野球は日本のＷＢＣ優勝で始まり、38年振りの阪神タイガース日本一で幕を閉じた。昔に比べ野球観戦の機会は減ったが、楽しむことができた。印象的なのは、選手、監督の言葉で「言霊」の存在である。

日本では古代から言葉に霊力が宿ると信じられていた。言霊は、発した言葉通りの状態を実現する力だ。万葉集でも「しき島のやまとの国は事霊（ことだま）のたすくる国ぞまさきくありこそ」といった歌があり、「大和の国は言葉に霊力がひそんでいる国だ。私が無事を祈っているのだから、無事に帰ってくるに違いない」と海路の無事を祈った歌である。

言葉には霊妙な力が宿っていて、良い言葉を口にすると、吉事が必ずやってくる。

小さい頃からＷＢＣ優勝が目標の大谷選手は「憧れてしまっては超えられない。今日一日だけは彼らへの憧れを捨てて、勝つことだけ考えていきましょう。」と決勝前にチームを鼓舞し、最高のムードを作り上げ世界一になった。

阪神タイガースの岡田監督は、選手が勝利を意識して重圧を感じないようにと『優勝』の代わりに『アレ』という隠語を使い始めた。監督が『アレ』と唱えれば、チームもファンもまとまり、願いが叶う響きを持つようになり、見事に日本一を遂げた。

どちらもまさに言霊である。

会計士試験は長丁場の試験である。辛い時やうまくいかないこともあるが、自分で発した言葉が気持ちを前にも後ろにも進めていく。「昨日の自分を超えるぞ」「合格するぞ！」と、自分の気持ちを前に進めるための言葉を発して、公認会計士試験の『アレ』を勝ち取ろう。

目次へ

特集１

令和６年公認会計士第Ⅰ回短答式試験
短答式試験の全貌解明！

12月10日（日）、令和６年公認会計士第Ⅰ回短答式試験が実施されました。午前９時半から午後６時まで、３時間半の途中休憩は挟むものの８時間半にもおよぶ長丁場の中で、集中力を持続させ、自己のもち得る知識を総動員して戦い抜かれた受験生の皆さん、本当にお疲れ様でした。
大原の講師陣も本試験終了後に届けられた問題に目を通し、自己の出来栄えに思いを巡らす受験生の皆さんに、試験の実態をいち早くお知らせすべく模範解答作りに取り組みました。

令和５年12月11日　東京水道橋校にて

【座談会出席者】左から

監査論
栗田 篤

管理会計論
水野 悦之

司会
永瀬 幹根

企業法
鴻巣 一樹

財務会計論（計算）
片倉 隆行

財務会計論（理論）
新井 孝志

目次へ

短答式試験の出題傾向と難度

永瀬　本日は、短答式試験の模範解答の作成に携わっていただいた講師の方々にお集まりいただき、出題傾向の分析と次回へ向けての対策などをお伺いして参ります。

司会　永瀬 幹根

さて、出題問数は財務会計論が28問、企業法と監査論が各々 20問、管理会計論が16問と前回と同様でした。また、出題形式は、４肢６択形式の理論問題が、監査論、企業法、財務会計論、そして管理会計論で出題されました。

そこで、試験実施の順に企業法からこれらの出題形式が受験生へ及ぼす影響や、問題そのものの難度などについてお聞きしていきます。

（なお、ここで難度とは、一般的な受験生が制限時間内で正解を導き出すうえでの設問そのものの純粋な難しさの程度を、大原の講師陣が受験指導の経験を通じて判定したものであって、最終的な合格基準を判定する尺度ではありません。）

目次へ

企業法

難問の多かった前回に比べて易化

鴻巣　形式面の変化はありません。問題数は20問で、そのうち商法と金商法が２問ずつ、会社法が16問でした。出題形式も４肢６択で正しいものの組合せを選ぶ形式で、配点はすべて５点でした。

内容面については、従来通り、条文の知識を問う肢がほとんどでした。直近の２回と比べると、見たことのない知識を問う選択肢は非常に少なく、大原の教材を正確に理解・記憶していた受講生さんであれば、自信をもって解答を出すことができ、十分に合格点を取れる内容であったと考えます。

判例に関する肢は、前回と同数の５肢（問題２ イ、問題７ エ、問題11 ウ、エ、問題12 ウ）でした。このうち 問題11 ウ以外の判例については、多くの受験生が知っているものであり、問題11 ウは見慣れない判例でしたが、大原では、「短答直対演習」にお

企業法　鴻巣一樹

目次へ

いて、ほぼ同じ表現で出題しています。なお、近時の改正点を問う問題の出題はありませんでした。

永瀬　内容面について、具体的に教えてください。

鴻巣　商法は、問題１が商人、問題２が商行為に関する問題でした。過去問の焼き直しのような選択肢が多く、比較的解きやすかったのではないかと思います。

金商法は、問題19が「金融商品」に該当するものを問う問題、問題20が目論見書に関する問題でした。問題19は細かい知識が問われており難問でした。また、問題20は問題19に比べると難度は下がりますが、それでも正解を出すのは容易ではなかったと考えます。

会社法16問の内訳は、設立２問、株式２問、機関６問、資金調達１問、社債１問、計算１問、組織再編２問、持分会社１問で、例年通りの内訳で、万遍無く出題されています。

全体的に見ると、今回は細かな知識に関する肢が少なく、標準的な知識を問う肢が多かったことから、合格レベルにある受験生であれば、15問（75点）以上取ることが十分に可能であり、80点以上も狙える問題であると判断しました。

永瀬　ありがとうございました。企業法は例年どおり基本的な出題に戻り、受験生も高得点が望めるようですが、管理会計論はどうだったのでしょう。

目次へ

管理会計論

解答の精度次第

水野　今回の短答式試験も昨今の出題傾向と同様、全部で16問でした。難度は前回と同程度となっていると考えられます。前回から引き続き全体のボリュームは一時期と比較して減少しており、一部の難解な問題、時間を要する問題を除けば、一通り手を付けることができました。計算問題は一つひとつのボリュームは多いと感じられますが、しっかりと時間をかければ得点可能な問題が多かったため、結果として得点を積み上げることができたでしょう。普段の演習を通じて積み重ねた経験値をそれぞれの問題に照らして、解き進めていくことが重要でした。理論問題に関しては、標準的な出題が多かったため、こちらも得点を積み上げることができたでしょう。全体として、問題量は前回同様、比較的想定通りのボリュームといえるでしょう。計算：理論の問題数の比率は近年の傾向通りで、計算８問：理論８問（配点でみると計算60点：理論40点）となります。出題内容としては、前半８問（50点）が原価計算、後半８問（50点）が管理会計の範囲と、万遍なく出題されておりました。時間のかかる計算問題もあるため、時間内に全ての問題に着手することは困難でした。着手する問題を選定したうえで、途中で投げることなく解ききり、確実に点数を積み上げることができたかが肝となります。

前半８問は計算問題が４問、理論問題が４問の出題でした。計算問題では、問題４ が相対的には解きづらく、いずれの問題も少し時間がかかるものの丁寧に

目次へ

解き進めれば十分に正答可能な問題でした。理論問題４問は「原価計算基準」から３問、「原価計算基準」外から１問出題されました。「原価計算基準」からの出題については、問題３ は空欄補充の問題でしたが、「短答理論対策」のテキストにて空欄補充に関して対策できていた方はほぼ対応できたかと思います。また、選択問題についても全体としては基準からストレートに出題された問題が多かったため、しっかりと「原価計算基準」を読まれていた方は正答が可能であったでしょう。また、「原価計算基準」外で出題された 問題７ も奇をてらった問題ではなく、ウの肢を除き、しっかりとテキストを読んでいただけていれば十分に正答可能でした。総じて、しっかりと大原の教材で対策いただいていれば高得点も狙える内容でした。

後半８問は計算問題が４問、理論問題が４問の出題でした。計算問題は、一部解きづらい問題があったものの「短答直対演習」を通じて養っていただいた「問

管理会計論　水野 悦之

目次へ

題を選定する力」を十分に発揮していただければ得点を積み上げることができたでしょう。一方、理論問題に関しては、前回、前々回の出題と同様、テキストをしっかりと読んでいただいていれば正答可能な選択肢が多かった印象です。

全体を通じて、やや難解な問題からは早めに手を引いて、解くべき問題の取捨選択が勝負の分かれ目になる出題となっておりました。短答式試験は相対評価の試験ですので、正答率が高いと想定される問題をどれだけ確実に得点していけるのかがとても重要です。管理会計論はここ最近、基礎的な問題に絞って冷静に点数を積み上げれば、稼ぐことはできなくとも大崩れしない安定した点数を獲得することができます。無理に応用的な問題に手を付けず、得点すべき問題を確実に正答する姿勢を持っていただきたいです。

永瀬　今のご説明で全般的な出題傾向はわかりました。では、次に各問題についてのコメントやランクについてお願いいたします。

水野　難度のランクを総括すると、Ａランクの問題が10問、Ｂランクが５問、Ｃランクが１問でした。Ｂランクが 問題２ 、 問題４ 、 問題７ 、 問題11 、 問題16 、Ｃランクが 問題14 です。ただし、個々のランクと問題全体の難度は必ずしも一致はしません。

まず計算問題です。 問題２ は材料費計算の問題でした。予定配賦について２種類の計算をしつつ、材料Ａには値引きもありといった問題でしたので、細心の

目次へ

注意を払って解答いただきたい問題でした。問題４は部門別個別原価計算の問題でした。間接経費処理に関する内容も含まれており、その結果処理量も多くなっているため、真っ先に回答をするような問題ではありませんでした。次の問題５は等級別総合原価計算の問題でした。等価係数のデータの与えられ方が通常の比ではないものの「原価計算基準」をしっかりと読み込まれていた方はどのデータを用いるかすぐに判断できたでしょう。理論問題の問題６もですが、原価発生原因主義に基づく等価係数の設定が可能であれば、それらに基づき等価係数をと思考を働かせることにより販売価格は等級製品の等価係数に用いないと考えることができたでしょう。続いて、問題８は標準原価計算からの問題でした。一瞬差異の空欄が少なく、戸惑われた方もいらっしゃったかと思います。また、修正パーシャル・プランと判明すれば後はスラスラと解答可能な問題だったでしょう。なお、仕掛品勘定などの合計数値については令和３年の論文式試験などでも問われており、今後も合計額を算定させる問題が出題されても不思議ではありません。問題10は財務情報分析の問題でした。自己資本利益率の算定・分解でしたので、貸借対照表項目について、財務レバレッジの計算でも単純平均を用いた計算を行わなければならないことがポイントであったでしょう。後半の管理会計の問題の中では比較的得点のし易い問題であったと考えられます。問題11はＣＶＰ分析の問題でした。処理量がやや多いものの時間をしっかりとかけてあげれば十分に正答可能な問題でした。問題14は

目次へ

経済的発注量の問題でした。値引も含まれており、解答はしづらい問題であったと考えられます。そのため、優先順位を下げて他の問題を解答すればよい問題であったでしょう。問題16は差額原価分析の問題でした。この問題に関しては、単位が個やロット等複数あり、検査作業は２人で同時で行うなど資料整理が重要であったと考えられます。

次に理論問題ですが、まず、原価計算の分野は、問題１は原価計算基準から、原価の諸概念に関する問題でした。引っ掛けについては典型的なものであったと考えられますので、ぜひ正答していただきたい問題でした。問題３は部門別計算の空欄補充問題でした。先ほども述べた通り、「短答理論対策」のテキストをしっかりと使用していただいていれば十分に解答可能であったでしょう。続いて、問題６は総合原価計算の問題でした。こちらも問題１と同様、典型的な問題でしたので、正答が望まれます。問題７は標準原価計算の問題で「原価計算基準」外の問題でした。しっかりとテキストを確認していただいていれば、正答にたどり着けたかと思います。続いて、管理会計の分野ですが、問題９は管理会計の基礎知識の問題でした。内容は典型的なものが多かったので、十分に得点可能であったと考えられます。問題12は予算管理の問題でした。イの「実行予算とは？」となられた方もいらっしゃったかと思いますが、他の選択肢で絞って解答を進めていただきたい問題でした。問題13は資金管理とキャッシュ・フロー管理の問題でした。特にイ～エの選択肢に関しては、典型的な

目次へ

問題であったと言えるでしょう。最後に 問題16 は投資計画の経済性計算の問題でした。内容としては基本的にテキストで確認していただいている内容となっておりますので、是非正答していただきたい問題でした。

今回も、Aランクの問題を見極め、それを確実に正答する力が要求されておりました。Aランクの問題で指示の読み飛ばしや読み間違い、計算ミス等による間違いやタイム・ロスがあると点数を積み上げることができません。いかに手堅く点数を積み上げることができたかが勝負の分かれ目でしょう。これらすべてを考慮しますと、管理会計論で望まれる点数は65点程度となるでしょう。

永瀬　問題集や演習を通じてAランクの問題を確実に解答できる計算力と、「肢別チェック」を通して誤っている肢の判断力を身に付けていくことで十分な点数が確保できたということですね。

さて監査論は、前回の短答式試験と比べると、いかがでしたでしょうか。

監査論

前回と同程度の解きやすさ

栗田　形式面は前回と同様で、４肢６択の問題が20問出題されており、正しい肢の組合せ番号を選ぶものでした。問題文のボリュームに大きな変化はなく、各肢に十分に時間をかけることができる程度の量であったと思います。

目次へ

難度については、前回と同程度の解きやすさであり、Ａランクの問題が16問、Ｂランクが３問、Ｃランクが１問でした。Ａランクの問題をすべて得点すると、80点獲得することが可能ですので、75～80点以上獲得したい問題でした。

今回の問題では、問題４、問題11、問題19がＢランク、問題２がＣランクでした。

永瀬　今回の監査論で、出題内容や傾向に特徴はあったのでしょうか。

栗田　毎回出題されている公認会計士法等の法律は問題３～問題５、内部統制報告制度は問題６、品質管理は問題９、問題10、不正リスク対応基準は問題20で出題されており、出題分野は前回までと大きな違いはありません。

具体的な内容としては、問題２において歴史の問

監査論　栗田篤

目次へ

題が出題されておりましたが、監査が開始された初期の段階である明治・昭和に関する事項が問われていたため、難しい問題であったと思います。

その他には、問題４において、監査人の刑事責任に関する肢が出題されておりました。刑事責任に関する知識は、非常に細かいものですので、この問題についても正解できなくても構わない問題となります。

また、問題10において、審査担当者の補助者、審査の中止に関する肢が出題されておりましたが、テキストに掲載されていたため、テキストを隅々まで確認していた方は正解できたのではないでしょうか。

上記のような正誤の判断ができない問題や細かい内容の問題も出題されておりましたが、テキストレベルの内容が多く出題されておりましたので、多くの受験生が手応えを感じることができたのではないかと思います。

永瀬　ありがとうございました。次に財務会計論ですが、計算のボリュームの変化はあったのでしょうか。また、難度も含め、内容面ではどうだったのでしょうか。

財務会計論（計算）

標準的な難易度

片倉　財務会計論の出題形式は、前回までと同様に全体で個別問題が22問、総合問題１問（設問６問）の構成は変わらずでした。個別問題のうち11問が計算問題で、200点満点のうち112点が計算問題に配点されています。

目次へ

個別問題は、平易な問題と難しい問題の見極めがしやすかったので、基本的な事項について網羅的に学習してきた方であれば、７問程度の正答は可能な問題でした。

総合問題は、いつもどおり連結財務諸表からの出題であり、大問１問（小問６問）の出題でした。部分点の確保は容易であり、４問程度の正答は可能な問題でした。

財務会計論（計算）　片倉 隆行

永瀬　財務会計論（計算）の問題を解くにあたっては、どのような点に留意する必要があったのでしょうか。

片倉　難しい問題に無理に挑戦するのではなく、簡単な問題を確実に正答して得点を積み重ねていくことが大事です。演習を通じてそのような解き方を身につけることができていれば、本番でも同じように戦えたと思います。

目次へ

永瀬　なるほど。では、個々の問題についての具体的なコメント及び難度をお願いします。

片倉　個別問題のＡランクは、問題７、問題８、問題10、問題12、問題13、問題18です。演習でも出題されていた論点がほとんどであり、これらの問題で失点を最小限にとどめることが最も重要です。網羅的に学習を進め、きちんと問題練習を積み重ねてきた方は、十分な点数を確保できたと思います。

個別問題の問題１、問題14、問題22はＢランクです。手薄になりがちな論点であったり、テクニカルな推定が必要であったりなど、やや取り組みにくい問題でした。Ａランク、Ｂランクから７問程度を正解したいところです。なお、問題４、問題５はＣランクです。

問題23～問題28は連結財務諸表の総合問題で、分量的には決して大きい問題ではないといえます。未実現利益の処理は初見では難しいかもしれませんが、演習で出題していたため部分点の確保はできるはずです。

永瀬　わかりました。財務会計論（計算）は解きやすい問題を確実に正解に結びつけることが重要だということですね。次に財務会計論（理論）に関してですが、今年の傾向はどうでしょうか。

目次へ

財務会計論（理論）

難度は標準レベル

新井　理論は令和５年第Ⅰ回と同様、11問出題されました。実務指針や適用指針の規定を出典とする難度の高い肢も一部含まれていましたが、基本論点からの出題も多く、全体としての難度は標準レベルといえます。７割程度の肢が大原の理論テキストの知識だけで判定でき、半数近くの肢が「短答直対演習」と「短答実力養成演習」で解いていた論点のため、これらの復習をしっかり行っていた大原生は高得点が可能です。

永瀬　それでは、個々の問題の難度と目標ラインをお聞かせください。

財務会計論（理論）　新井 孝志

新井　Ａランクは 問題２ 、 問題３ 、 問題６ 、 問題９ 、 問題11 、 問題15 、 問題16 、 問題20 の８問です。 問題２ は理論テキストで学習している名目貨幣資本

目次へ

維持と実質貨幣資本維持の考え方が理解できていれば容易に正答可能です。残りの７問は、４肢中３肢以上の肢が大原の理論テキストの知識だけで判定でき、さらにすべての問題に大原の「短答直対演習」と「短答実力養成演習」で的中している肢が含まれているため、大原生は容易に正答可能です。

次にＢランクは 問題19 と 問題21 の２問です。

問題19 は、アを除く３つの肢が適用指針の規定を出典とする内容のため、Ｂランクとしました。ただし、アとウの肢は大原の「短答実力養成演習」の確認問題で解いている内容であり、イの肢は「×」と判定する受験生が多いと予想されるため、正答可能な問題であったといえます。 問題21 は、イとウの肢が難度の高い実務指針の内容のため、Ｂランクとしました。ただし、アとエの肢は大原の理論テキストで学習している基本的な内容であり、この２つを「○」と判定するだけで正答の番号を選べるため、大原生には正答可能です。

問題17 はＣランクです。すべての肢が税効果適用指針の規定を出典とする難度の高い内容であったため、この問題は正答できなくてもかまいません。

Ｂランクのうち１問でも正答できれば有利になりますが、Ａランク８問を確実に正答して、11問中８問の正答が、財務会計論（理論）の目標です。

永瀬　わかりました。財務会計論（理論）は、高得点も期待できそうですね。

目次へ

過去問分析の価値と短答対策について

永瀬　さて、次に今回の出題傾向を踏まえて、今後の短答対策のポイント等をお聞かせください。

企業法

基本＋α

鴻巣　出題傾向にかかわらず、まずは「基本的な知識を確実にする」ことが何より大切です。テキストの太字の部分や肢別チェックの問題を固めることが必要不可欠です。前回、前々回の本試験は難問が多かったため、徒に細かい知識の習得に走る受講生さんもいらっしゃったかもしれませんが、それらの知識の習得は、あくまでも上記の基本的な知識の習得をしてから行うようにしてください。

　また、今回の問題が標準的な内容であったことから、「次回はまた難しい問題が出るのではないか」と心配される方もいらっしゃるかもしれませんが、「基本的な知識を確実にする」という姿勢を変える必要はありません。ただ、確かに、最近の本試験では、テキストの太字以外の部分（アスタリスクの部分を含む）からの出題も増えつつあることは事実です。ですから、時間の許す限り、テキストの太字以外の部分（アスタリスクの部分を含む）も確認しておくと、より高得点を狙えるでしょう。

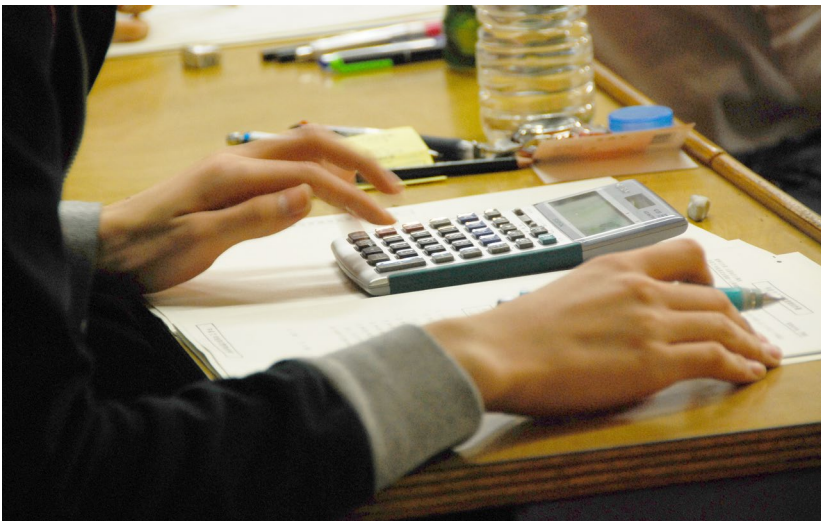
管理会計論

Aランク問題をしっかりと

水野　今後の短答対策としては、Aランクの問題を確

目次へ

実に得点するための、計算力を身に付けること、そして、正誤判断をするために、テキストを読み込むこと、こちらを繰り返してまいりましょう。どうしても、本試験が怖いという印象の強い科目ですので、得点すべき問題をミスなく正答する、この姿勢を持つようにしてください。管理会計論での合格点とは「周りに負けない点数」です。他の科目に比べて、時間的制約の大きい管理会計論では、直前期には“費用対効果”を考え、細かい論点ではなく、負けない、踏みとどまる点数を確実にとる、ということが求められます。悪いなりに常に一定以上の点数をとる、ということを求めましょう。



※試験会場イメージ

この戦い方の場合、Ａランクでの取りこぼしは致命傷になりますので１問１問を速くかつ正確に解く力が要求されます。そこで、計算については、演習の復習優先度Ａランクの問題や問題集を学習の中心教材と

目次へ

し、これらの中で解けない問題、時間がかかる問題があるならば、まずはそれを速く解けるようにすることが大切です。できなかった問題、時間のかかる問題をピックアップし、間を空けずに短期間で繰り返し解くことが求められます。基礎的な計算力、すなわちAランク問題に対する精度とスピードが付いてくれば、時間のかかりそうな問題、内容が難解な問題を見極める力も必然的に養うことができるので、手堅く、かつ効率的に点数を積み上げることができるようになります。また、ここまでできるようになったのを前提として、自習時には意欲的に難しい問題、例えば演習で復習優先度Bの問題と戦うことも大切です。ワンランク上の問題を高地トレーニングとして経験しておくことで、基礎的な問題がより確実に正答できるようになるからです。

監査論

基礎が何よりも重要！

栗田　まず、過去問は、繰り返し出題されていますが、演習や肢別チェックにおいて、情報提供しておりますので、それを確認していただければ十分です。ご自身で過去問分析を行う必要はありません。

次に、最近の短答式試験の監査論は、基礎的な知識で７割得点できるような出題となっています。しかし、正解できる問題の全ての肢を容易に判断できるというわけではありません。判断が難しい肢を避け、判断が容易な肢を確実に見極めなければなりません。

そのためには、基礎的な知識について、正確に、漏

目次へ

れなくおさえることが重要となります。テキスト、肢別チェック、演習を繰り返し学習することにより、基礎的、典型的な問題に対応できる知識を確実に習得してください。

※試験会場イメージ

財務会計論（計算）

質の高い練習を重ねる

片倉　短答式試験ではＡランクの問題で失点をしないことが大事です。そのためには十分な練習量が求められます。講義期には講義の復習にあたってしっかりと問題集に取り組み、繰り返し問題を解く必要があります。さらに演習期に入ってからも演習の問題を繰り返し解くことが大切です。大原の教材は本試験の出題傾向を反映しているので、繰り返し練習の教材として安心して使っていただくことができます。

　問題を解く際には機械的な反復にならないように、解答の過程で気になったところについて、こまめにテ

目次へ

キストに戻って確認をするようにしてください。

財務会計論（理論）

肢別チェックと短答実力養成演習で過去問対策は十分

新井　理論の出題範囲である会計基準・適用指針等の規定は膨大な量があります。大原のテキストは、過去問を分析したうえで、これら膨大な量の中から出題の可能性が高い基本論点を抽出し、必要最小限の内容で合格点がとれるように作成しています。「肢別チェック」と「短答実力養成演習」は、再び出題される可能性が高い過去問を取り入れていますので、これらの問題を解けば、過去問対策も十分です。また、2024年受験対策の「肢別チェック」は全面改訂を行い、基本論点を網羅的・効率的に復習できるよう更なるバージョンアップを図っています。

　テキストと短答対策用のインプット教材である「ポケットコンパス」を利用して基本論点の理解と暗記を進め、「肢別チェック」と「短答実力養成演習」の問題演習を通じて、これら基本論点に関する知識の精度を高めれば、Aランク問題は確実に正答できるようになります。あとは本試験と同レベルの「短答直対演習」を通じて実戦経験を積み、短答対策を万全なものとしてください。

永瀬　合格点を取るには、どの科目も細かな知識に走らず、正答すべき基本的な問題を確実に取るというスタンスにおいて共通しています。

目次へ

テキストを読み込み、情報を整理して基礎的な知識の精度を高め、「短答直対演習」等の実践的な機会を通じて肢の判断力を養うことが必要だということですね。

先生方のお話しから、今後も短答対策の学習の基本的なスタンスは従来と変わらないということがわかりました。ご参集の先生方、昨日の声援活動に引き続く模範解答の作成でお疲れのところ、誠にありがとうございました。

それでは、これで令和６年第Ｉ回短答式試験の振り返りを終了いたします。

目次へ

特集2　演習期の過ごし方

1．はじめに

12月短答が終わり、いよいよ本格的な論文対策のためのカリキュラムへと移行する。

会計士試験の場合、計算科目（財務会計論〔計算〕と管理会計論）を早く仕上げることが求められるが、徐々に理論科目の勉強にウェイトを移していくことが必要となってくる。

個人差があることを前提に、標準的な配分パターンとしては概ね次のような形が想定される。

<table>
<tr><th>年内の自習時間の配分（目安）</th><th>年明けからの自習時間の配分（目安）</th></tr>
<tr><td>計算８：理論２</td><td><table><tr><th>１月～３月</th><th>４月以降</th></tr><tr><td>計算４：理論６</td><td>計算２：理論８</td></tr></table></td></tr>
</table>

以下では、主として初学者コース生の方を対象に、これから本試験までの演習期の過ごし方、学習スタンスを説明したい。

2．バランスを保つことに留意する

これから学習時間がたっぷりとれる年末年始を迎えるが、演習期を乗り越えるための勉強方法について述べたい。

まず留意すべき点は学習のバランスを保つことである。バランスとは、暗記と理解のバランス、６科目（会計学を財務会計論と管理会計論の２科目とする）のバランスである。

目次へ

①暗記と理解のバランスについて

暗記と理解のバランスを保つひとつの方法は、「……だ。なぜなら、……だからだ。」と小さな論点ごとに「これは大体こういうことだ！」とまとめてしまうことであろう。この覚え方は、ただの丸暗記になっていない。理由付けがされている。なおかつ、こねくり回してもいない。

今ぐんぐん成績が伸びている方は、実はどの科目も完璧になんてなっていない。一方で、コンパクトに頭の中に整理することは、進んでいるといえよう。コンパクトにしすぎて、不正確な理解のままになっている場合もある。だが、答案に書けば、×はつけられず、△くらいはつく程度にまとめている。だから、講師との会話のなかで△な点が指摘され、そしてだんだん○に近づいていく。実に効率が良い勉強法である。

②６科目のバランスについて

ここで６科目のバランスというのは、当然、勉強時間を各科目へ６等分に振り分けるということではない。もちろん、前掲の表のようにまずは計算科目に重点を置く。計算科目を先に仕上げなければならないということは、誰でも言うことだ。計算科目が、「仕上がる」とは、どういうことを言うのか。目安を言うならば、標準的な１時間問題を解き終わって、10分か15分以内で見直し、復習が終わる状態になることだろう。つまり、解法について知らないことはない、同じミスを最小限度にするための精度をあげる練習で日々を過ごすことで足りるだろう。ステップ演習Ⅰ等をもちいて、まずはこの状態を目指そう。

目次へ

3. 理論科目の勉強方法

①「ちら見復習」のすすめ

個人差はあるだろうが、記憶は薄らいでいくものである。ちょうど下りエスカレーターを逆に上っていくように覚えても忘れを繰り返す。

1）短期合格者に見られる傾向

学習した瞬間に、忘れることを知っている。忘れるのがイヤだから、短時間で、何回も復習する。

2）成績が伸び悩む方に見られる傾向

久々に、テキストを開けた時に、自分が忘れていることに気づく。まずいなと思い、その日は夜遅くまでその科目の勉強をする。

短期合格される方は、なぜ、短時間で復習ができるのか？

理由は、無理なく、軽く、ちらっと復習しているのである。「ちら見復習」で済むように、テキストにメモ書きがされている場合が多い。たとえ、どんなに能力が高くても、この程度の復習で終わらさなければ、すべての科目の復習に手が回らないだろう。

なぜ、力を抜いて無理なく見直す勉強をしなければならないのか？なぜなら、この試験は膨大な情報量をいっぺんに頭の中に維持していなければならないからである。几帳面に神経質に復習していたら、必ず、バランスを崩してしまう。

②「継続は力なり」というけれど

成績が伸び悩む方の勉強は、継続がなされていない。

目次へ

ここで、継続されていないというのは、勉強をサボっている方のことを言っているのではない。毎日、大原の授業を頑張って復習しているのに、継続性が保てていない方のことを言っている。

膨大な復習をしなければならない。全部にとても手が回らない。

だけど、しばらくテキストを開いてもいない科目がいくつもできてしまう。まずいなとは思うけれど、手が回らない。悲しいことに、毎日勉強しているのに断続的に勉強していないのと同じことになってしまう。

会計士試験のように多科目受験の場合、毎日勉強しているのに継続できていない状態になってしまう方が多いのである。

③復習に手が回らないのはなぜ

能力が劣っているからなのか？そうではない。復習の方法が多くの場合、適切ではないのだ。

サッと、簡単に、「ちら見復習」するしか方法はないだろう。こんなんで、復習したといえるのか、不安いっぱいになるけれど、他の科目の復習もあるんだ、仕方がない。「ちら見復習」ができれば、前に復習したところへ戻る時があっという間にやってくる。それを、繰り返し繰り返し行うのである。次第に脳に定着してくるだろう。

そんな復習だと理解が不正確にならないか？

当然、そんなことになる時もあるだろう。でも、そんなことは構わない。ぐるぐる復習を何回転もしよう。この方法のほうが、結局、理解するのも早くなるのだ。

目次へ

④情報の集約化を図る

「ちら見復習」のツールとして繰り返し勉強する教材は、テキストであろう。テキストに情報を集約していく。多科目を同時に回していく際、テキスト、レジュメ、ノート等をその都度開きながら勉強していくというやり方は不効率である。講義中の板書内容や補助レジュメ等をテキストの該当箇所に貼り付けたり、挟み込んだりしながら、「これ１冊」というものを作り上げておく。講義中に指摘された重要度や参照条文等は、テキスト中にメモして書き込んでおく。こうすることでテキストにメリハリが付き、「ちら見復習」の回転率や効果も格段に向上する。

⑤理論科目の勉強方法の最終形

講師は体系づけて勉強しろというけれど、その科目を何年も勉強しているから体系がハッキリしてくるのであって、６科目を限られた時間で勉強しなければならない受験生にとって、体系づけて勉強するということは皆目見当がつかない場合もあるだろう。

体系づけて勉強するとは、つまり、様々な論点を関連づけて理解することであり、そのためには浅くても良いから何回転も復習する必要がある（６科目もあるんだ。浅く復習しなければ、何回転もできない）。

ぐるぐる全体が復習できているからこそ、色々な論点を関連づけることができるのである。

はじめから、体系的理解なんてできる訳がない。はじめからできるなら苦労はない。徐々に組み立てていくのである。そのためには、小さな論点ごとにコンパ

目次へ

クトにまとめて頭の中に整理していく。

その整理の手助けとなるのが、テキストの目次であり、復習したかどうかの確認に使用しよう。

そうすると、いつの日か、ぼんやり体系らしきものが見えてくる。焦る必要はない。本試験までに仕上げれば、合格できるのだから…。

目次へ